「異文」の間に〈運と気と念と〉
―書誌学・文献学に関わって―

熊本守雄

本日お話しするタイトル・題目ですが、

「異文」の間（はざま）に〈運と気と念と〉

―書誌学・文献学に関わって―

ということでして、いささか仰々しく、おどろ〳〵しい感じが、我ながらしております。

ここで私が云わんとするところは、私には、ささやかな体験しかありませんが、その中で、私と、ある文献資料との出会いが、たま〳〵のこと、偶然といってよいような状態、まさしく「運」としかいえない場合もありました。

又、私の、ある文献に対する思い、「念」があったから出会えたのではないか、と思われることもありました。

更には、本の方にも人に近づこうとする「気」があるのではないか、と神秘的に感じたこともありました。

そうした極めて非科学的で、学問的でない話、ということになります。

今からお話しする内容は、私が永年に亘って関心を持ち続け、深く関わってきました文献学及び書誌学という学問に関することであります。

まず、私がこうした学問に心を寄せるようになった、私の心の中における原風景とでもいったところからお話してみようと思います。

私の父は愛書家であり、多くの本を所有していた蔵書家でもありました。

ですが、広島に投下された原爆によって、ほとんど灰燼に帰してしまいました。文字通り、灰と煙とになってしまったのです。

爆心地から、一、五キロメートル以内の距離にあった

我が家の周辺は、全て燃え尽きて、数日で煙も出なくなったのに、我が家のあった所からは、その後、何日も燃えきらなかった本から煙が出つづけた、と幼い頃、私は聞かされました。

一旦、燃えてしまうと、どのような貴重な本も、この世から姿を消してしまうものだ、ということを、幼いなりに感じたわけです。

その後、大学に入って国文学・日本文学の世界に本格的に関わるようになって、多くの貴重な本が、人災も含めて、災害等で、この世から姿を消してしまったということを知りました。

多くの貴重な本が失われた出来事をいくつか列挙してみますと、応仁の乱（一条兼良の桃華坊における三万巻に及ぶ燃失）、幕末から明治の初めの時期の廃仏棄釈の頃（多くの寺院で書籍が焼かれたり、散佚しています）、大正十三年九月一日の関東大震災（東京大学にあった尤大な量に及ぶ馬琴の自筆原本、山口県の岩国吉川家の駿河台邸の火災に伴なう図書の損傷）、第二次世界大戦の空襲（水戸徳川家の彰考館文庫、広島市立浅野図書館、山口県では周南市徳山の児玉文庫四万冊の焼失、下関の赤間神宮の旧国宝長門本《阿弥陀寺本》平家物語の焼損）、最近では、十五年前の淡路・阪神大震災、更には五年前の中越大地震における小千谷の蔵の倒壊に伴う書籍の損傷などを挙げることができます。

特に、筆と墨を使って、和紙に書写された写本は、この世には同一の本は他になくて、全くオリジナルなものであって、その本一本しかないのだ、ということを強く感じるようになりました。その本がなくなるということは、写本の世界においては、今も申しましたように、全く同じ本は他にはないわけですから、永遠に姿を消してしまい、とりかえしのつかないことなのだということを強く実感できるようになりました。

そういうことで、四十五年前に、前任校である山口県立大学に（当時は山口女子短期大学といっておりましたが）赴任するとすぐに、山口県下に伝存する文献（写本・版本）の所在調査を始めました。

当時は、山口県下の図書館における写本の管理・保存状態は、決して良くはありませんでした。

司書の資格を持った人が一人もいない図書館も少なくありませんでした。

又、図書館の職員には、退職前の職員を充てて、退職前に少し楽をさせてあげようといった雰囲気の所もありました。

職員の数も少なく、新規購入の図書の手続きに追われて、それで手一杯という状態で、明治の頃から地元の篤志家より寄贈された多くの図書が、変体仮名が読めない

ということもあって、全くの手つかずの、未整理の状態であり、寄贈された図書の台帳も作られていない所もありました。

紙を食べる紙魚（しみ）によって汚損された図書が処分されたり、誰も知らないところで、古い本がこの世から姿を消すということもあり得るような状況でした。

蔵書目録も整備されていませんから、当然、世間には、その所在も知られず、誰も利用できない、宝の持ち腐れのようなところもありました。

そこで、地道な調査を積み重ねて、それを文献目録として、昭和55年から57年にかけて『山口県に伝存する国語学・国文学・国語教育関係文献（写本・版本）目録』四冊にまとめることができました。

○

私としては、そのような古書、この世から姿を消してしまいそうな古い文献にこだわり続けたのですが、その古い時代の作品になりますと、原作者の自筆になる「自筆原本」はほとんど存在しておりません。ほとんどが後の世の人が書き写した、いわゆる「転写本」です。

そして、多くの人が書き写して、転写を繰り返しているうちに、意識的な「修正」を行なったり、「削除」したり、逆に「加筆」したりすることもあります。

あるいは、無意識の中に犯す誤（うち）まりもあります。たとえば、「誤字・脱字・衍字」といった現象が、そうです。

その結果、原作者の意図とは異なる本文や表現になってしまうことも、多々あります。

作品研究にあたって、本文の不確かさが、少なからぬ影響を及ぼします。

一字もゆるがせに出来ないのですが、しかし、世間には、荒っぽい議論をする人がいるものでして、たとえば、源氏物語に登場する末摘花という女性（常陸宮の姫君ですが）、この姫君を取り上げた場合、彼女は、「末摘花」の巻と「蓬生」の巻に登場します。

末摘花の容姿は、普賢菩薩の乗り物といいますから（象のことですが）、その象の鼻のように長く、しかも、その先は赤い木（こ）の実をつけたようだといいますから、人並の容貌ではない姫君なのですが、性格は、いたって古風で、源氏の再度のおとずれを一途に待つ、女のあわれさを一身にただよわせているような、愚直なほど誠実で、けなげな女性として描かれています。

極端な議論をする人は、こんな言い方をします。「末摘花を浮気な性格の人物として描いているような源氏物語の伝本があるとでもいうのか。少々の違いなど、どうでも、いいではないか」などと、いうのです。

そう言われてみれば、確かに、末摘花が浮気をしたなどと書いた写本など無いわけですから、そのような気に

なりますが、ところがたった一字ですが、誤植したテキストに基づいて論じたために、議論全体が空中分解したという話があります。

○

英文学の世界では大変有名な話のようですが、メルヴィル（Melville）が一八五一年に（今からおよそ一六〇年前頃）書いた『モウビ・ディク（Moby Dick）』（どう猛な鯨のあだ名ですが）、日本では『白鯨』と訳されて親しまれている作品です。

この『白鯨』という作品について、高名な学者たちが、コイルド・フィッシュ（Coiled fish）《輪になった魚》とあるべき所を、ソイルド・フィッシュ（Soiled fish）《汚損した魚》と誤植したテキストに基づき、倫理性を論じましたけれど、そのソイルドが誤りであることが判明し、議論全体が空中分解してしまった、というのです。

たった一字の違いなどと、ばかにはできないのです。

○

そういうことを、先人達も早くから経験的に気付いておりまして、一つ一つの文献、即ち昔の人の著述したもの、記録したものを、その原本の姿に何とかして復元しようと努力しました。

その上で、本物なのか、偽せ物なのか判別し、その中に書かれている意味を、正しく理解するために、語法やことばの意味を明らかにします。と同時に、記述されている内容に即して、歴史的事実を究めることによって、その当時の一切の事、たとえば、その時代の言語とか文学、あるいは美術、更には、科学、神話、伝説、制度、法律（法令）、あるいは、経済、民俗、信仰習慣など、すべての文化領域について調査をし、その当時の人々の知的生産物、あるいは情意的な生産物を再確認しようとしております。

○

私が関心を寄せている文献学という学問は、西洋ではフィロロギー（Philologie）といっております。正確な言い方をすれば、西洋のフィロロギーという学問を、日本では文献学と翻訳して使っている、ということであります。

西洋におけるフィロロギーは、もとギリシャ語のフィロロギィア（Philologia）「学芸を愛する」の意であり、その源はギリシャ・ローマにさかのぼります。因みに、フィロロギー（Philology）は、英語では「言語学」の意で使っています。

フィロロギーという学問は、もともとヨーロッパ文化の原拠・根源としてのギリシャ・ローマの文化を明らかにすることを目標としていました。

十四・五世紀の文芸復興期（ルネッサンス）を経て、

十八・十九世紀に至って、ドイツで古代学アルテルツームス ヴィッセンシャフト（Altertums-wissenchaft）の方法として組織されました。

ギリシャ・ローマの文化を中心とし、人間の精神が生み出した文化生活の一切のものを対象とするものでして、先程も申し上げましたように、言語だとか文学、美術、あるいは科学、更には神話、伝説、制度、法律、経済、民俗などなど、すべての文化領域について、「文献を資料」とすることによって、解明していき、それによって、古代の生活や文化の全体像を描き出そうとする「古代文化学」といった性格を持っていました。

○

そうした西洋のフィロロギーという学問と、日本の江戸時代の国学との類似性に気付いたのが、芳賀矢一博士（一八六八～一九二七）でした。

学生時代の私の感覚では、芳賀矢一博士は、私が生まれる前の、昭和の初めになくなっていらっしゃいますから、過去の人という感じでしたが、結婚して、私の家内の母方の祖父にあたる鈴木敏也の恩師であって、広島文理科大学が出来た時、芳賀博士の推挙で広島文理科大学の教授になったことを知り、身近に感じるようになりました。

○

近世の国学は、日本の古代文化に対する関心をはっきりと示しておりまして、古典研究は古代文化を明らかにするための一段階としての意図をもっていました。

奈良時代の古事記や万葉集など、上代の文献を本（もと）として、日本の真相を知ろうとしました。

具体的な作業の方法としては、平安時代の末を最下限として、それ以前の古書、古物（ふる）語、古歌に限って、その伝本を集め、その形態・成立年時、成立事情、著者、筆写者、伝来等を調査する「書誌的研究」をしております。

更に、その諸々の伝本の本文を比較検討して、つまり「異文」（今日お話ししている題目の中にある「異文」なのですが）、それを比較検討して、その本文の伝来や系統や価値を明らかにするといった、現在の「本文批判」（テキスト・クリティク）らしきこともしております。

又、一語々々の意味や語法から、文章として、また一部の書として、意味や趣旨までを検討する、いわゆる「註釈研究」も行なわれておりました。

○

芳賀矢一博士は、「文学史攻究法研究」のために、明治三十三年にドイツに留学なさいます。そこで、ドイツ文献学と出会うこととなり、その芳賀矢一博士によって、ドイツ文献学が日本に採り入れられ、近世までの国学の方法との調和が試みられます。（国学の欠点としては、

古代のみに偏した尚古主義、儒仏的思想を排除し、日本をすべて根本とする国粋主義的偏向、補助学科の知識の欠除等が挙げられ、その是正を芳賀矢一博士は力説されました。）

そして、日本の新しい国文学の研究が出発したわけです。

それ以後、文献学的な研究方法が、国文学・日本文学の研究の主流となり、最も多くのすぐれた実績を残してきた研究方法であったかと思います。

私は、そうした文献学的な研究方法に、学生時代から心ひかれ、関わってきました。

○

学生時代の私は、「本の顔を覚える」といった気持で、専攻とする領域には直接関係のない本であっても、図書館や研究室などにある本を、手あたり次第に片っ端から、手に取って、目次をひろげ、どういう内容の本なのか、ざっと見て、興味ある項目があると、それを飛ばし読みでも、読んでみる、ということをしておりました。

これがあと〳〵、いろ〳〵と、私には役立ちました。それで、学生諸君にも、演習の第一回の冒頭で、「本の顔を覚えるように」といってきたわけです。

○

ここで、私の研究歴に簡単に触れておきます。

私は、卒業論文には、私家集を取り上げ、「曽祢好忠集成立攷」というタイトルで提出しました。若気の至りで、「攷」の字が使いたくて、このような題目にしたわけです。

曽祢好忠という歌人は、生前は社会的には不遇で、死後に高い評価を受けるようになります。

大鏡や今昔物語集によりますと、永観三年二月十三日に行なわれた、円融院の子の日（ひ）の御遊に、召しもないのに出席したということで、一座の人々に追い出されたという話が伝えられています。かなり誇張された説話だとは思われますが、好忠自身も、つらね歌の詞書で、「円融院のおほん子の日（ひ）の日、召なくて参りたりとて、さいなまれて、又の日奉りける」といっておりますから、さいなまれた事実はあったと思われます。彼は、貴族社会から疎外されがちな存在であったか、と考えられます。

曽祢好忠が活躍した時代は、二番目の勅撰集である後撰集から三番目の勅撰集である拾遺集にかけての時期にあたりますが、その後、五番目の勅撰集である金葉集の時代になりますと（勿論、好忠の死後になりますが）、和歌革新の担い手と高く評価されるようになって、最も多く金葉集に歌の採取されるような存在になります。

折口信夫さん（歌人としては、釈迢空といいましたが）などは、好忠の歌に、後の隠者的風貌を見ることができ

るなどともいっていらっしゃいます。

又、曽祢好忠は、日本で初めて百首歌という定数歌を詠んでおり、それが大流行し、源順や恵慶法師、源重之、和泉式部、相模などが、相継いで詠んでいます。

○

又、私には、和歌史に関する関心事が、もう一つありました。

古今和歌集の真名序で「衣通姫之流」という語で、女流歌人の系譜の存在を指摘すると同時に、「猿丸大夫之次」という言葉でもって、隠遁詩人とでもいうべき歌人の系譜のあったことを指摘しています。

私は、学生時代からこの隠遁歌人の系譜、僧正遍昭・素性法師などから始まって、恵慶法師・安法法師を経て、能因法師や西行につながる隠遁歌人の系譜に強い関心を寄せておりました。

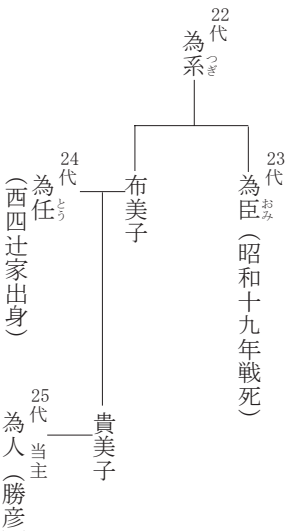
平安文学の主たる担い手は、受領層（地方官）階級ですが、その階層に育った紫式部・清少納言・和泉式部・赤染衛門等の女房クラスの女性の果した役割は大きく、研究者の中には、平安文学を女房文学と規定する人もいるくらいです。

それが、中世になりますと、その主たる担い手は、隠遁者になります。

そうした平安文学から隠者文学ともいえる中世文学への橋渡し的存在として歌僧（法師歌人・歌人僧侶）を考えることはできないか、と考えた私は、歌僧の存在に注目して、かなり早い段階からマイクロフィルムに撮って、紙焼写真にして、資料を集めておりました。

大学院に入って間もない、ある日のことです。いつもの如く、「本の顔をおぼえる」といった感じで、冷泉為臣（おみ）さんの出版された『時雨亭文庫(一)』をめくっていて、ハッとしました。

冷泉為臣さんは、お父さんの為系（つぎ）さんのあと、冷泉家を継ぐ立場にいらっしゃった方で、京都大学の吉沢義則先生の指導を受けられた方です。吉沢先生の勧めもあって、為臣さんは冷泉家の秘庫にある貴重な資料を順次学界に紹介しようとされていた矢先に、召集を受け、昭和十九年に戦死なさったため、『時雨亭文庫』も、第一巻しか出なかったものです。



私は、この本の「参考図版の第七図」を見た時、すぐにこの面はどこかで確か同じようなものを見たことがある、と思いました。

（資料の１頁）をお開き下さい。

上段は、冷泉為臣さんが昭和17年11月に教育図書株式会社より出版された『時雨亭文庫(一)』の参考図版の第七図として掲載されたもので、冷泉為臣さんは「定家卿青年期の筆跡」と見做していられます。下段は、全く同じ冷泉家本を、平成になって、朝日新聞社より出版された『冷泉家時雨亭叢書』第十七巻『平安私家集四』に所収されたものです。縮小の率は違いますが、同じ本を違う時期に撮影しただけで、似ていて当然です。

次に、（資料２頁）下段の「流布本系統（定家本系統）宮内庁図書寮五〇一・四〇一本」と見較べて下さい。

大変よく似ています。異なる箇所を見付けるのは、困難な感じがします。

実は、（資料２頁）にある図書寮五〇一・四〇一本は、（資料１頁）の時雨亭文庫蔵定家筆本を忠実に臨模した本なのです。神技のような感じがします。

その技法を簡単に説明します。まず、和紙の種類から説明することにします。

和紙には、二種類ありまして、材料と製法とが違っております。

私達に最もなじみがあるのは、楮紙です。原料は「こうぞ」が主でして、江戸時代の中期頃から「みつまた（三椏）」を交ぜ漉きしております。糊として「とろろあおい」「のり木（のりうつぎ）」の粘液を使って、漉いております。楮紙を使った写本は袋綴にするのが一般的です。

もう一つが雁皮紙でして、斐紙とか、鳥の子紙ともいっているものです。この雁皮には、土佐雁皮、みやま雁皮、黄雁皮、青雁皮、縞雁皮といろいろありますが、「にかわ」をとかして、漉きます。この紙の特徴は、表面がなめらかで、やや黄味がかって、光沢を帯びていることです。鳥の子紙とも呼ばれる所以でもあります。公家本・嫁入本などに用いて、多くは両面書写をして、列帖装にします。

この雁皮紙（斐紙）を薄く漉いた紙を「薄様鳥の子」とか、たんに「薄様」といっております。

模写本（摹本）を作るときには、その薄様に「礬水（どうさ）」を引きます。

礬水というのは、焼き明礬（硫酸アルミニュウムと硫酸塩の化合物である明礬《結晶は、氷砂糖のような感じのもの》を弱火で焼いたもの《かき餅を焼いたようにふくれます》）を粉にしたものです。それを水に溶いて、「にかわ」を漉ぜたものを、「どうさ」といいます。焼き明

礬は、昔から汗止めにも使ってきたものです。

薄様に、その「どうさ」を引きますと、にじまなくなります。薄い紙ですが、墨が下ににじみませんし、墨のりも良くなり、キラキラして美しく、銀砂を引いたように、大変きれいなものです。色紙などに、日本画を描く時には、「どうさ」を引くことが多いようです。

「どうさ」を引いた薄様は、墨書した写本の上にのせますと、下の字がよく透けて見えて、上からその字をなぞって書いても、下の写本を汚すことがありません。

そこで昔から「どうさ」を引いた薄様を使って摹本を作ってきたわけです。

改めて（資料２頁）下段の宮内庁書陵部蔵図書寮五〇一・四〇一本を御覧下さい。

私は、この図書寮五〇一・四〇一本は、（資料１頁）に掲げていますような、定家自筆本恵慶集・上巻を極めて厳密に臨模した模写本であって、定家自筆本の原型を正確に伝えている摹本である、と判断しました。

そのことを「図書寮本恵慶集（五〇一・四〇一）について――定家自筆本の原型――」としてまとめまして、修士課程在籍中に、稲駕敬二先生のご推挙で、『国文学攷』の32号に掲載して頂きました。

そのような恵慶集との出会いがあった年ですが、昭和37年７月の中旬、梅雨末期の豪雨の中を、大学院一年生であった私は、金子金治郎先生と稲賀敬二先生のお供をして、島原公民館の松平文庫の調査に行きました。

そこで、島原藩主の松平忠房が書写させた写本の一つで、彰考館蔵本と同一系統本である九十七首本の恵慶集に出会うことができました。

更に、外題は、「道経集」とありましたが、その内容は、前半が恵慶集の前半で、後半は顕綱集の前半を納めている特異な性質を持った伝本の存在を知りました。

この恵慶集の伝本は、歌序（歌の順序）が乱れ、内容は春の部だけで、歌数も四十六首と、恵慶集の伝本の中では最も歌数の少ないものですが、書写階梯の少ない、善い本文を持った伝本でした。

これらの、流布本とは形態の違う伝本に接することによって、恵慶集に対する、私の関心は深まっていきました。

その島原松平文庫の調査が終わった後、折角の機会ということで、私は平戸の松浦史料博物館に行くことにしていました。

私は先生方と別れて、島原鉄道や国鉄を乗り継いで、平戸に向ったのですが、梅雨末期の豪雨で、各地のボタ山が崩れて、国鉄は各線で不通となり、武雄で足止めを食ってしまいました。

当時は、まだ北九州では、石炭産業の名残りのボタ山

が各地で沢山見かけられたものです。

仕方なく、その夜は武雄駅前の温泉の大衆浴場で（一日中、営業しておりました）、夜を明かしました。

温泉に浸かって、湯から出るとラムネを飲む、ということを繰り返しておりました。

翌日、予定の経路を変更して、一部開通した路線を使うために、諫早までひき返し、そこで途中下車して、伊東静雄の墓参りをしました。（これは、私の恩師の清水文雄先生が日本浪漫派の活躍の場の一つであった「文芸文化」時代から、伊東静雄と深くおつきあいをなさっていたことを、先生から伺って、知っていたからです。）

諫早で、眼鏡橋を見たり、伊東静雄の墓参りまでは良かったのですが、諫早の食堂で取った昼食で（おそらくスープが悪かったのではないかと思いますが）、食中毒を起こし、ひどい下痢に悩まされながら、途中何度もトイレ休憩をせざるを得ず、平戸に着いたのは、夜遅くでした。

そのように苦労しながらも、平戸に行った甲斐がありました。

松浦史料博物館では、一点の資料を見るごとに千円が必要でした。（当時、学生食堂では、大学牛乳が一本十円、朝食が十五円、カレーライスが二十五円といった時代でした。）ほぼ五十年前の、学生の身分であった私には、大きな負担でしたが、貴重な出会いが待っておりました。

まず書庫から出してもらったものは、「天祥院様御筆歌仙」と上書きされた白い包み紙に包まれて、桐の箱に納められている巻子本仕立ての恵慶集一巻でした。

箱の中には、恵慶集一巻の他に、「恵慶集ニ副御書付」と上書きされた覚書が添えてありました。これは松浦静山の没後に、この巻子本の手入れをし、合わせて、これを入れる箱を作った際に記したところの覚書でした。（なお、因みに言い添えますと、天祥院こと松浦鎮信は、元禄十六年に歿していますから、この巻子本の書写は、それ以前であることは確かです。）

この巻子本は、先程の（資料２頁）の、図書寮五〇一・四〇一本と同様に、定家自筆本の筆跡を、極めて正確に臨写しております。

ただ、巻子本に仕立てられているために、定家自筆本の紙面のおもかげは伝えられていません。

この松浦天祥院筆巻子本の恵慶集が、あとで確認し得たのですが、一〇四首本・一〇三首本及び九十七首本の祖本であると判断されました。

茶事にも通じていた天祥院（松浦鎮信）が定家の筆蹟を鑑賞する目的をもって臨写したもののようでした。

更に、松浦史料博物館には、豪華な装丁の、冊子本の恵慶集も伝えられておりました。

列帖装、桝形本で、表紙には、亀甲紋様の裂地を用いていて、表紙中央に、金粉をちりばめた布片が貼付され、定家流の筆跡で「恵慶集」と外題が記されてあります。見返しには、金泥で雲・山河・草木を描いており、空の部分には金切箔を置き、料紙は布目鳥の子を使っておりました。

「運」と「念」を感じるような調査の旅でした。

○

私にとっては、こうした伝本との出会いやたまたまの小さな発見が、その後、修士論文の『恵慶集の研究』につながり、更に、その後、昭和53年3月、38歳の時に出版した『恵慶集　校本と研究』（桜楓社）に結実することになりました。

昭和52年度の文部省科学研究費補助金の、いわゆる学術図書出版助成を得て出版できたものですが、この本には、こういう思い出もあります。

この本の原稿を清書していた頃、昭和51年の11月の下旬ですが、三男が誕生しました。その時、二男は三歳でしたが、家内がお産で入院している間、私は二男のお守りをしながら、清書を続けていました。

清書している私のそばに子供を坐らせて、これは「な」、これは「お」、これは「こ」、これは「の」といった具合いに、平仮名を書く時には声を出して、読み上げておりました。

二男は、（かわいそうに）いやがりもせず、おとなしく坐っておりました。そんなことをしている内に、いつの間にか、平仮名をみな憶えておりまして、退院して家に帰ってきた家内は、そのことを知って、びっくりして、「ああ、それで、あなたは『もりお』というんだ。さすが、名前を『もりお』というだけあって、『お守り』が上手だ」と、えらく感心したものです。

○

ここで、恵慶集のことに触れたついでに、恵慶集に関して、書誌学的な問題を、二・三取り上げてみようと思います。資料のプリントをご覧頂きながら、お聞き下さい。

（資料の1頁）、その下の段の「時雨亭文庫本」の恵慶集6丁目裏と7丁目表との見開きの部分を御覧下さい。

次に、その部分を翻字している、（資料6頁）の下部を見て下さい。そして、1頁の下の段と6頁の下部とが同時に見えるように、お開き下さい。

〈32〉番歌の詞書の3行目、「かすみを」の右傍に「春日野を」と書き添えています。

ここの箇所は、おそらく、「かすみを〈加寸美遠〉」と定家は書写したものの、「かすかのを（加寸可能遠）」でなくてはならないことに気付き、誤読されることのない

ようにと、その右傍に「春日野を」と漢字で表記し直したものであろう、と考えられます。「かの（可能）」の二字を「み（美）」と読み誤ってしまうことは、（その逆の場合も）、ままあることで、定家も初めは、依拠した親本において「かすかのを」とあった箇所を、「かすみを」と誤読してしまったものであろう、と思われます。

なお、ここの箇所は、定家本系統の中においても、かなりの異同があります。定家自筆本を臨模した図書寮五〇一・四〇一本は、いうまでもなく、自筆本における書き込みと寸分も違いません。又、平戸の松浦史料博物館蔵本も二本共、定家自筆本と同様に書写していますが、尊経閣文庫本（前田家本）では、「みちに」の下に二字分の余白をとり、その余白の右傍に「春日野を」と書き加えています。神宮文庫本は「春日のかすミをミやりて」、彰考館文庫本・島原公民館松平文庫一三五‐八本は「春日野をかすミにミやりて」、松平文庫一三五‐九本は「春日野ゝ霞をみやりて」、天理図書館本は「春日野かすミを見やりて」、今治市の河野信一記念文化館本・龍谷大学本・京都大学本は「かすみを見やりて」の「かすみ」の右傍に、漢字で「春日野」と書き添えています。自筆本では「春日野を」と「を」の字を書き添えておりますが、「を」の字は書き落としています。東京大学本は「霞を見やりて」、その他の伝本は「春日野を見やりて」となっております。

定家自筆本よりいくつかの系統が派生している定家本系統の恵慶集の場合は、系譜をたどっていく系譜法において、書承過程を考える上で、極めて典型的ともいえる恰好の事例を提供しているといえます。即ち、原型より如何様に本文が推移・展開していくのか、あるいは、どのように分化していくのか、等の本文転化の過程を考察する場合には、極めて適切な標本的資料たり得る資格を持っているように思われます。

○

次に、（資料の7頁）をお開きください。

定家自筆の恵慶集においては、「やへむぐらしげれるやどのさびしきに人こそみえねあきはきにけり」の歌、小倉百人一首にも入っている有名な歌ですが、この「八重葎（むぐら）」の歌を含んでいた一葉が切断されている、ということを取り上げてみよう、と思います。

定家自筆本において、一葉の脱葉があるのではないか、と思われる箇所があります。古本系統の本文と照合し、歌の有無を検討していくと、自筆本の19丁と20丁との間に、一葉の脱落があるらしいことがわかります。

（資料7頁）に、定家本系統の本文と古本系統の本文とを対照できるように、二段に示しております。古本系統の（99）番歌から（103）番歌までの五首が、定家本系

統の恵慶集では欠脱しております。

定家自筆本において、第二括の内側から三枚目にあった料紙の右半分（一葉分）が切断されることがあったのだろう、と思われます。

室町時代から江戸時代にかけて、茶人によって定家の書跡が珍重されるという状況がありました。

茶人達によって書跡の鑑賞がなされているうちに、茶の湯の掛物として古筆の使用が定着していくのですが、その際、茶会における掛物としては、定家の筆跡になるものが殊に珍重されております。

近衛家熙（予楽院）の身辺の行動・見聞・口授などを、侍医であった山科道安が、日々、日記体に書き継いだ『槐記』の、享保十三年（一七二八年）三月二十二日の条に、次のような逸話を記しています。

津田宗及が千利休を招いて茶湯を催した際に、床の掛物として、天王寺屋重代の小倉色紙であり、かつ又、恵慶法師の詠になる「八重葎しげれる宿のさびしきに人こそみえね秋はきにけり」の色紙を懸けて置いて、その上で、その場の雰囲気を「八重葎」の歌に合わせてしつらえていた、と伝えております。

この恵慶の「八重葎」の色紙は、天王寺屋重代の色紙でして、津田宗達（一五〇四～一五六六）・宗及・宗凡の愛玩になり、これは、当時屈指の名物として天下に喧伝された一軸であったようです。

『宗湛日記』によりますと、恵慶の「八重葎」の歌を記した掛物は、茶会で幾度も使用されたことを知ることができます。

（資料の８頁）の表を御覧下さい。

（資料８頁）

小松茂美氏著『古筆』（講談社）の「古筆茶会使用例一覧表（室町時代～江戸時代）」の一部を抜粋させていただくと、

番号	西紀	年月日	掛物	出典
47	一五八七	天正15・1・9	定家ノ式帋（しきし）（八重葎の歌）	宗湛日記
48	〃	〃 3・8	定家ノ色紙（〃）	〃
50	〃	〃 6・13	定家式帋（〃）	〃
51	〃	〃 10・9	定家ノシキシ（〃）	〃
56	一五九二	文禄1・12・25	色帋（しきし）（〃）津田宗凡所持	〃
57	一五九三	〃 2・1・27	色紙（やへむぐらしげれるやどのさびしきにひとこそ見ゑねあきはきにけれ）津田宗凡所持	〃
60	一五九七	慶長2・3・8	シキ帋（八重葎の歌）〃	〃
67	一六〇五	慶長10・6・15	式帋（やへむぐらしげれるやどのさびしきにひとこそみゑねあきはきにけり）〃	〃

この定家の筆になる「八重葎」の色紙は、恵慶法師の「八重葎」の歌を記した小倉色紙と考えられますが、話を恵慶集にもどして考えますと、百人一首にも採られている、恵慶の有名な「八重葎」の歌を含むところの定家自筆本恵慶集から一葉が切断され、鑑賞されるということも充分に有り得たことであろう、と思われます。

切り取ったところの恵慶集切を、一幅の掛物に仕立てたことも充分に考えられます。それは、小倉色紙に準じて、あるいは、それ以上に、珍重されたであろう、と思われます。

定家自筆本恵慶集において、「八重葎」の歌を含む一葉が切断されており、現存する恵慶集のうち、定家本系統の諸本全てに、この一連五首の歌を欠いているという事実は、定家自筆本が一度も転写されることのなかった、かなり早い時期に切断されたことを示している、と考えられます。

定家自筆本恵慶集において「八重葎」の歌を含む一連五首の歌が欠脱したのは、和歌の筆跡を茶室の床飾りに使うようになった室町時代の末頃まで遡り得ることではないか、と思われます。そして、それが茶室や書院の床の掛物として使われた蓋然性は極めて高い、といえます。

因みに、このような、定家の筆蹟になる典籍を一・二葉切断するようなことがしばしば生じたために、冷泉家に伝えられた典籍の散逸を危惧した将軍秀忠が後水尾天皇に申し出た結果、寛永五年（一六二八年）頃から、武家の京都所司代と朝廷の武家伝奏の両役が、時雨亭文庫を封印して（勅封して）管理するようになり、冷泉家の当主であっても、勝手に土蔵を明けて出入りすることは禁じられる、といった時期もありました。

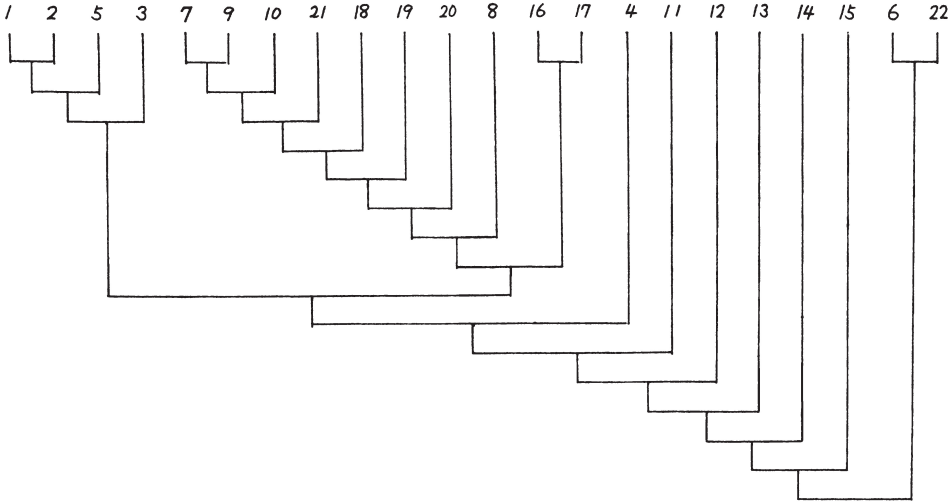
○

次に、僧正遍昭集の校本にまつわる話に移ります。

遍昭集の校本を作成した段階で、私の前任校であった山口県立大学の同僚で、「情報処理」担当でいらっしゃった先生（図像分析を専門としていた若い方でしたが）、その方に相談しました。「この校本のデータを基にして、写本の転写の系譜のようなものを明らかに出来ないものか」と話をもちかけますと、「計算機処理によって、諸本間の類似度は出てくる」ということでした。

そして、『校本・遍昭集』を、学生の情報処理演習の素材に使って下さり、データを入力して、それを比較した結果、（資料13頁）のような諸本間の類似度の評価が出てきました。（資料の内、遍昭集の伝本に関する書誌的説明箇所の資料については、掲載省略）

その時、その方は、例えば、翻字すれば、平仮名の「は」と表記される場合であっても、その字母（字源）が「波」の「は」と、「八」の「ハ」の区別がされていれば、更



に精密なデータになる、という話をされました。それを聞きまして、私は字母（字源）に基づく校本の作成を思いつきました。

ところが、その若い先生は、その後すぐに（次の年度に）、母校に転勤なさり、その内、私も山口県立大学を定年退職し、この尾道大学にお世話になることになりました。その時、尾道大学には経済情報学部があって、情報処理関係の先生方も多いことだろうから、同様の情報処理に関心のお有りになる先生もいらっしゃるだろう、と楽しみにして、期待して赴任しましたが、残念ながら、この大学ではお会いすることができませんでした。

○

ですが、この度、伝本において使用されている変体仮名の字母（字源）の異同を校異として校本を作成してみることにしました。それが『校本・安法法師集』の場合です。

平成二十一年度の前期に開講した「中古文学専門演習Ⅱａ」の受講者五名（日本文学科三年生四名、二年生一名）の諸君によって作成されたものです。『尾道大学芸術文化学部紀要』第9号に掲載していただけるように、手筈が整えられております。

こうした字母（字源）の異同を校異にした校本のデータを、計算機処理すれば、諸本間の類似度は、かなり正

確な数値（%）で出てくると思っております。

○

最後に、本の側にも「気」があるのではないか、という話です。いささか、あやしげな話になります。

今、私の手許に『源氏御談義（千鳥抄）』二冊があります。

これは山口県立大学名誉教授でいらっしゃった上野さち子先生（岩波新書で『女性俳句の世界』を出していらっしゃいます。又、ライフ・ワークとしてまとめられた『田上菊舎全集』を和泉書院から出版なさっている方です。）、その先生よりなくなられる一年前に頂戴したものです。

『源氏物語御談義（千鳥抄）』は、大内氏の被官（家臣・奉公人）であった平井相助という人が、准大臣の四辻善成（『河海抄』の著者）の講釈を基にして、のちに善成について親しく不審の箇所を質問して、二帖に書き著した、源氏物語の注釈書です。

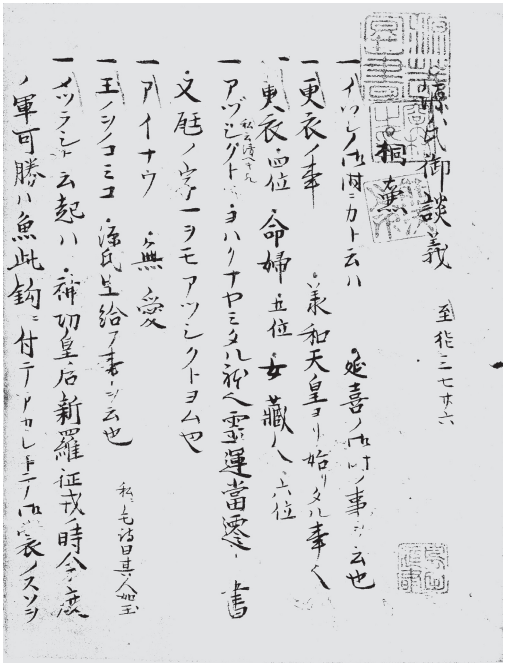
蔵書印記の一つとして「島田蔵書（朱印、1.4×1.4㎝）」の印がありまして、（資料17頁参照）、嘗ては徳山の教学院（歴代の住職は島田氏です）に伝えられていたことのある伝本だ、ということが判明します。

徳山教学院は、徳山藩の藩禄寺院として、藩主の無病息災や、藩内の五穀豊穣を祈願し、年ごとに大峯山入山を果たす任務を負っていました。

歴代住職の中には、円盛・浄観（藍泉）・蕃根（みつね）などの漢詩文を多く残している人物もおります。殊に、浄観（役藍泉）は、聖護院派修験道の大先達でして、また徂徠学派の流れをくむ儒学者でもありました。又、徳山藩校であった鳴鳳館の教授をも務めた人物で、亀井南冥・昭陽、頼春水、池大雅などと交遊がありました。藍泉集をはじめとして、多くの詩文を残しています。

現在、周南市立中央図書館（旧、徳山市立中央図書館）

（資料17頁）


源氏御談義　桐壺

至徳三年六

一イツレノ比ニカト云ハ　延喜ノ比ノ事ヲ云也

一更衣ノ事　兼和天皇ヨリ始リタル事ヲ云

一更衣　四位　命婦　五位　女蔵人　六位

一アブシグト　ヨハリナヤミタル祈ヘ霊運當遷　書

文脚ノ字一ヲモアツシクトヨムヤ

一アイナウ　無愛

一王ノシノコミコ　源氏ヲ給フ事ヲ云也　私毛詩曰真人公主

一イツラシト云起ハ　神功皇后新羅征伐ノ時公主後ノ軍可勝ハ魚此鈎ニ付テノカレトテ此ノ比表ノスソ

に、島田文庫が所蔵されております。それは徳山教学院の住職を代々務めた島田家から、昭和四十年及び平成六年に寄贈された教学院関係資料を主として、島田家伝来の文書記録や詩文集類を含め、七三〇点よりなる集成であります。

平成十一年三月末に、十年前になりますが、徳山市立中央図書館創立五十周年記念事業の一環として『徳山市立中央図書館所蔵島田家文庫目録』が刊行されました。その際、私が委託される形で、調査及び目録作成の事業に関わりました。

島田家文庫本には、蔵書印記として「教学院書庫」（朱印、丸印、直径3.1㎝）の他に、まま、「島田蔵書」の印記があり、それは上野さち子先生より頂いた『源氏御談義』の印記と全く同じものです。

私が頂戴した本は、徳山の教学院の住職であった島田家に伝えられていた時期もあった、と蔵書印記を通して考えられますが、その後、三重県上野市の書店である沖森書店（沖森直三郎氏）を経て、昭和32年8月1日付で、当時、山口県豊浦（とよら）高校の校長を勤めていらっしゃった小川五郎先生が入手なさっています。

小川五郎先生は、旧制山口高等学校（新制山口大学文理学部の前身）の教授を勤めたこともあった方で、山口県では有名人でいらっしゃいました。考古学・博物学・郷土史関係の多くの論文や近代文学関係では国木田独歩関係の論文も、執筆していらっしゃる方です。余談ですが、御子息は衆議院議員を勤められたこともあります。

上野さち子先生は、昭和59年6月30日に、山口市米屋町にあった第三書房の店じまいの売立てで所蔵なさることになり、その後、私に下さったもので、先生は平成13年9月22日に急逝なさり、私には先生の形見ともなったものです。

この源氏御談義（千鳥抄）は、一旦、県外である三重県に出ながらも、小川五郎先生の手で、再び山口県に帰ってきたもので、この本には、防長の地に帰りたいという「気」があって、その「念力」が働いたように、私には思われてなりません。本の方にも「気」があるように、私は感じております。

同時に、徳山市立中央図書館所蔵の島田家文庫を整理・調査し、目録作成に関わったことが機縁となって、私がお預りすることになったようにも、私自身は感じております。

又、私にとっては岳父にあたる（家内の父親である）田中晃は、旧制山口高等学校の学生時代に、小川五郎先生より和歌の手解（ほど）きを受け、終生、親しく交誼を頂き、先生が亡くなられた際には、葬儀委員長を勤め、弔辞を捧げてもおります。

この本を巡って、こうした種々の因縁を感じると共に、不思議な邂逅を思っております。

○

最後に、古典文学の研究の将来について、一言ふれておきたいと思います。

現在の日本の大学においては、全国的に古典を軽視する傾向があります。日本文学に限らず、大学で学ぶべきあらゆる領域の学問には、必ず「古典」といわれるものがあるわけですが、それを軽視する傾向がうかがえます。

今や、実学的な、インスタントともいえる、「スグ役立ツ」「スグニ、身ニツク」ということばかりを追い求める現象が、大学にまで浸透してしまった、といってよいかと思います。

古い世代と新しい世代との間で、知的に共有できる世界が小さくなってきており、知的共通領域に、断絶が生まれかけてきております。それは、恐ろしいほど深いものであります。

古典を軽視すると、今まで先人達が積み重ねてきた文化の伝達は、殆んど不可能にならざるを得ない、と考えられます。

たとえば、変体仮名で書かれている写本が読めないとなると、江戸時代までの人達と文化の伝達はできなくなり、断絶が生まれてしまいます。

そんな思いを若い頃から持っていた私は、大学においてだけでなく、いろ〳〵な機会に、変体仮名を取り上げて、一人でも多くの方に変体仮名になじんでいただき、写本を読めるようになってもらいたい、と努力してまいりました。

甚だ、おこがましい物言いですが、文献の消失を防ぐことにもつながり、文化財保護の一助になると考えてきました。

○

さて、いま進められている大学の独立行政法人化（独法化）なるものが、経営努力の伸展を図るものであるとしても、それは、やがては古典の軽視にとどまらず、基礎的な学問の衰退をまねくことになってしまうのではないか、と心配になってきます。

たとえば、東京大学史料編纂所に対しては、金喰い虫という非難が、東京大学の中からも将来出てくるようになるかもしれません。

医学の領域でも、基礎医学が軽視され、外部資金が獲得しやすいということで、臨床医のみを志向することになりかねないわけです。

短期間の間に成果を挙げる研究しかしない、とか、外部資金を獲得するということしか頭にない研究者を生み出すことになってしまいます。

いささか乱暴な物言いになってしまうかも知れませんが、最近の歴代の総理大臣は、今の鳩山首相を除いて、ほとんどといってよいほど、大学において、マンツーマンのような授業は受けていないのだろう、と思います。

たとえば、マンモス大学のような、大きな私立大学において、何百人、時には千人に近い学生を大教室に集め、教員はそうしたマスを対象にして、マイクを使って授業をする。そのような場しか経験してしていないのだ、と思います。又、おそらくは彼らは、「哲学」などの演習を、マンツーマンで受ける経験など持ち合わせていない、あるいは、少人数教育を受けた経験の不足しているところから、教育の世界にも経済効率を求めるような発想が生まれてきているように、私には思えます。

基礎的な学問を、あるいは古典を軽視していると、将来、必ずや大きなシッペ返しがきて、その時、日本は取り返しのつかない状態になってしまっているだろう、と心配になります。

独法化によって、運営経費が削減され、大学教育が疲弊したり、貧困化することだけは、叡智を集めて、避けなくてはなりません。独法化して良かったという大学人の声が聞かれるようでなくては、日本の将来に明るい希望は持てません。

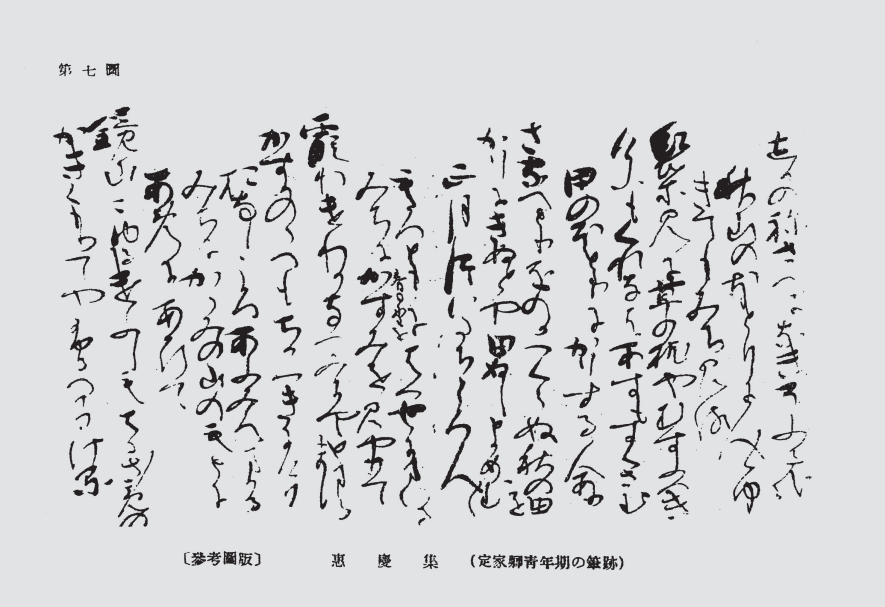
長時間にわたる御静聴、ありがとうございました。

（平成二十一年十二月十九日、「尾道大学日本文学会」《しまなみ交流館》において）

―くまもと・もりお　尾道大学名誉教授―

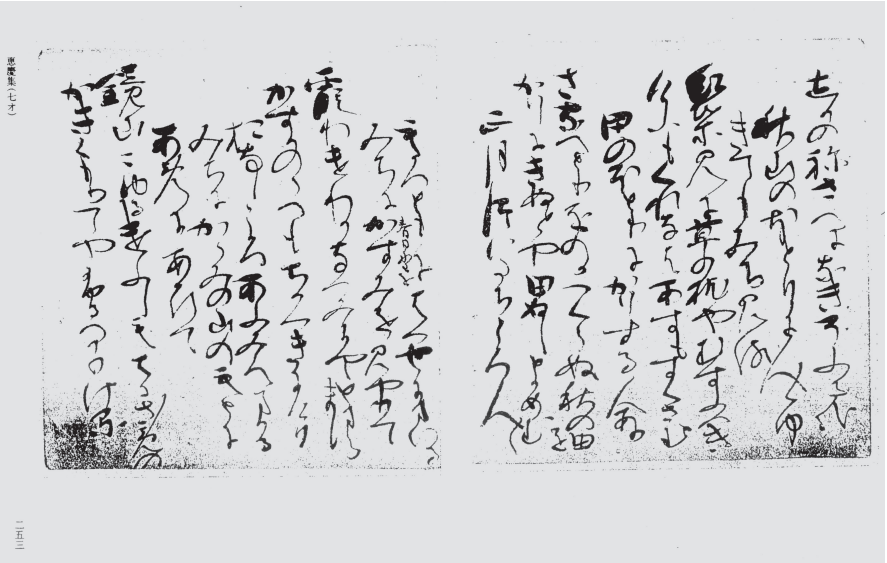
（資料１頁）

『時雨亭文庫(一)如願法師集　前権典厩集　露色随詠集』
冷泉為臣編　教育図書株式会社　昭和17年11月25日



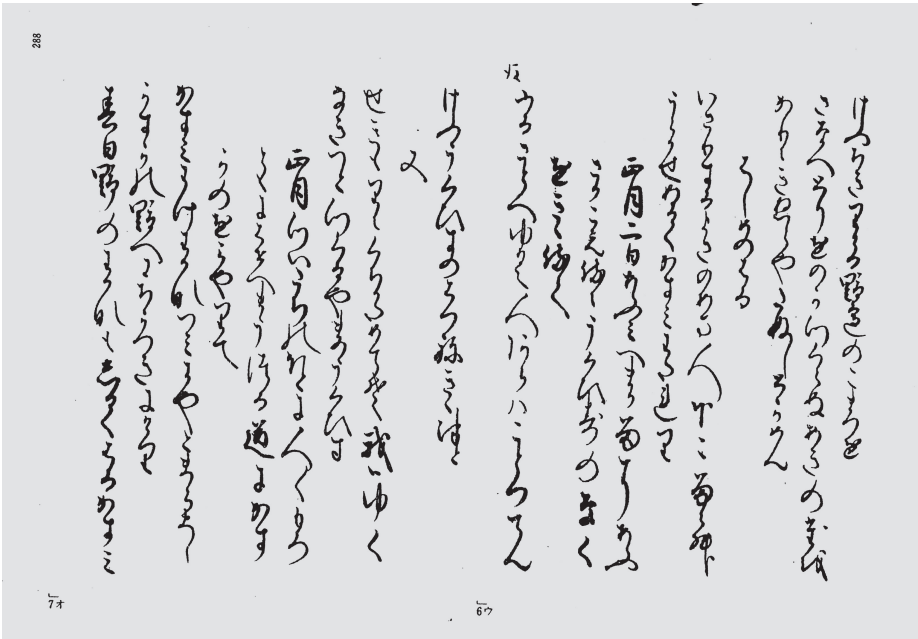
時雨亭文庫本（『冷泉家時雨亭叢書』平家私家集四所収）

恵慶集（六ウ）

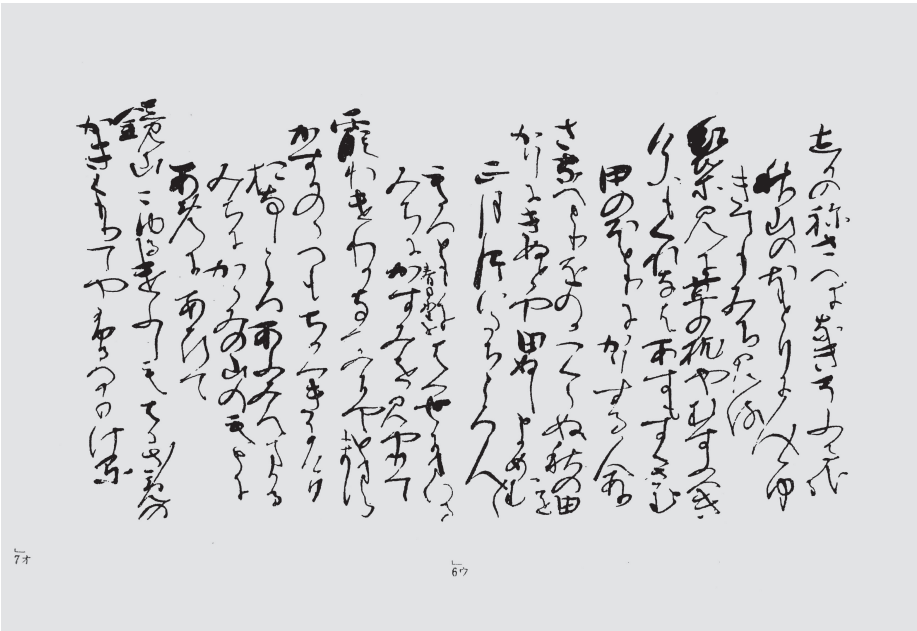


（資料２頁）

古本系統　宮内庁書陵部蔵　図書寮一五〇・五五八本



流布本系統（定家本系統）宮内庁書陵部　図書寮五〇一・四〇一本



（資料６頁）

正月二日、あふミへまかるに、あふ
さかこえ侍に、うくひすのなく
をきゝ侍て

（27）後 ふるさとへゆく人あらハことつてん　」6ウ
けふうくひすのはつねきゝつと

又

（28）せきもりにくちかためてそ我ハゆく
なきつとつくなやまのうくひす
正月ついたちのほとに、人〳〵もろ
ともに、はせへまうつる道に、かす
かのをミやりて

（29）かすミわけわかなつミにやとまらまし
かすかの野へにちかつきにけり

（30）春日野のわかなもしるくはるかすミ　」7オ
かすミわたれりかたをかのハら
正月はかりに、あふミへまかる道
に、かゝ見山のほとりにて、あめに
あひ侍りて

（31）かゝミ山こふるけふしもはるさめの
かきくもりやハふるへかりける

二月二日、あふさかこゆるほとニ、
うくひすのこゑをきく

〈2〉ふるさとへ行人あらハ事ってむ
けふうくひすのはつねきゝつと

〈3〉関守にくちかためてそ我は行
なきぬとつくな山のうくひす　」1オ
正月ついたちころ、人〳〵　」6ウ
もろともに、はつせにまいる
みちに、かすみを見やりて（春日野を）

〈32〉霞わけわかなつみにやとまらまし
かすかのゝへもちかつきにけり

おなしころ、あふみへまかる
みちに、かゝみの山のもとに、
あめにあひて

〈33〉鏡山こゆるけふしもはるさめの
かきくもりてやふるへかりける　」7オ

（資料７頁）

十月ハかりに、ハせにまうてゝか
へるミちに、さほ山のふもとにやと
りて、夜なれハ、もミちのミえぬ
ころ

（97）さほ山のかせのこゝろもしらすして　」19ウ
もミちをミてやこよひあかさむ
またのあしたに、山をミやれハ、も
ミちのきりにかくれたり

（98）もミちミにやとかるわれとしらねはや
さほのかハきりたちかくすらん
ふねにのりて、やまのもミちミる
ころ

（99）あきやまにたてらましかハなきさこく
ふなきもいまハもみちしなまし　」20+
九月五日、あるところのもミちあ
はせするに、人〳〵よミ侍へり、その
題に
たひのかり、よるのあらし、
あれたるやと、くさむらのむし、
ふかきあき

十月許、はつせにまてゝかへるに、
日くれぬれは、さほ山のふも
とにやとりて、夜なれは、もみち
見えぬ心、人〳〵よむに

〈96〉佐保山の風の心もしらすして
もみち見すとやこよひあかさむ
又のあしたに、山、きりにかくれたり

〈97〉もみち見にきたる我ともしらねはや
さほのかハきりたちかくすらむ　」19ウ

(100) くさまくらいくよのかすをむすふらん
もミちをとをミかよふかりかね
よるのあらし

(101) わきもこかたひねのころもうすきほと
よきてふかなんよハのやまかせ
あれたるやと
└20ウ

(102) やへむくらしけれるやとのさひしきに
人こそミえねあきハきにけり
くさむらのむし

(103) くさかれのほとちかけれはあきのむし
やともあらハになきよハる哉
ふかきあき

(104) くれなゐにいろとるやまのこすゑにそ
あきのふかさハまつしられける
となせといふ所にもミちみにまかりて└21オ

(105) おほゐ河かハせのもミちゝらぬまハ
となせのきしになかゐしぬへし

ふかき秋

〈98〉紅のいろとる山のこすゑにそ
秋(続)のふかさハまつしられける
十月、大井河のもみち見に、
人〳〵まかる所に

〈99〉大井河かはへのもみちゝらぬまは
となせのきしになかゐしぬへし

（資料13頁）

表１．諸伝本間の類似度（％）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
1	100.0	100.0	50.7	43.5	58.0	49.3	40.6	49.3	37.7	40.6	23.2	23.2	23.2	50.7	31.9	30.4	34.8	42.0	42.0	40.6	27.5	52.2
2	100.0	100.0	50.7	43.5	58.0	49.3	40.6	49.3	37.7	40.6	23.2	23.2	23.2	50.7	31.9	30.4	34.8	42.0	42.0	40.6	27.5	52.2
3	50.7	50.7	100.0	65.2	73.9	37.7	50.7	60.9	49.3	47.8	31.9	44.9	40.6	60.9	42.0	50.7	47.8	52.2	52.2	50.7	47.8	34.8
4	43.5	43.5	65.2	100.0	71.0	46.4	50.7	66.7	53.6	53.6	37.7	42.0	39.1	63.8	50.7	56.5	49.3	58.0	58.0	58.0	46.4	34.8
5	58.0	58.0	73.9	71.0	100.0	47.8	59.4	73.9	56.5	55.1	34.8	34.8	39.1	72.5	46.4	53.6	56.5	60.9	59.4	56.5	49.3	39.1
6	49.3	49.3	37.7	46.4	47.8	100.0	46.4	40.6	43.5	42.0	23.2	29.0	29.0	42.0	37.7	37.7	42.0	42.0	43.5	43.5	36.2	72.5
7	40.6	40.6	50.7	50.7	59.4	46.4	100.0	55.1	94.2	72.5	43.5	49.3	46.4	55.1	65.2	69.6	75.4	73.9	73.9	69.6	63.8	43.5
8	49.3	49.3	60.9	66.7	73.9	40.6	55.1	100.0	59.4	56.5	36.2	39.1	34.8	65.2	55.1	52.2	55.1	55.1	58.0	53.6	46.4	40.6
9	37.7	37.7	49.3	53.6	56.5	43.5	94.2	59.4	100.0	75.4	46.4	49.3	44.9	58.0	68.1	71.0	76.8	76.8	76.8	72.5	66.7	40.6
10	40.6	40.6	47.8	53.6	55.1	42.0	72.5	56.5	75.4	100.0	49.3	42.0	40.6	55.1	55.1	56.5	62.3	63.8	62.3	59.4	52.2	39.1
11	23.2	23.2	31.9	37.7	34.8	23.2	43.5	36.2	46.4	49.3	100.0	31.9	27.5	36.2	31.9	40.6	42.0	43.5	42.0	42.0	36.2	23.2
12	23.2	23.2	44.9	42.0	34.8	29.0	49.3	39.1	49.3	42.0	31.9	100.0	49.3	42.0	42.0	59.4	55.1	46.4	43.5	47.8	56.5	29.0
13	23.2	23.2	40.6	39.1	39.1	29.0	46.4	34.8	44.9	40.6	27.5	49.3	100.0	40.6	42.0	44.9	46.4	44.9	44.9	43.5	49.3	29.0
14	50.7	50.7	60.9	63.8	72.5	42.0	55.1	65.2	58.0	55.1	36.2	42.0	40.6	100.0	46.4	53.6	60.9	56.5	55.1	53.6	52.2	39.1
15	31.9	31.9	42.0	50.7	46.4	37.7	65.2	55.1	68.1	55.1	31.9	42.0	42.0	46.4	100.0	59.4	60.9	65.2	68.1	65.2	56.5	34.8
16	30.4	30.4	50.7	56.5	53.6	37.7	69.6	52.2	71.0	56.5	40.6	59.4	44.9	53.6	59.4	100.0	78.3	72.5	69.6	69.6	71.0	36.2
17	34.8	34.8	47.8	49.3	56.5	42.0	75.4	55.1	76.8	62.3	42.0	55.1	46.4	60.9	60.9	78.3	100.0	78.3	72.5	72.5	65.2	39.1
18	42.0	42.0	52.2	58.0	60.9	42.0	73.9	55.1	76.8	63.8	43.5	46.4	44.9	56.5	65.2	72.5	78.3	100.0	94.2	92.5	69.6	39.1
19	42.0	42.0	52.2	58.0	59.4	43.5	73.9	58.0	76.8	62.3	42.0	43.5	44.9	55.1	68.1	69.6	72.5	94.2	100.0	91.3	66.7	40.6
20	40.6	40.6	50.7	58.0	56.5	43.5	69.6	53.6	72.5	59.4	42.0	47.8	43.5	53.6	65.2	69.6	72.5	92.8	91.3	100.0	71.0	39.1
21	27.5	27.5	47.8	46.4	49.3	36.2	63.8	46.4	66.7	52.2	36.2	56.5	49.3	52.2	56.5	71.0	65.2	69.6	66.7	71.0	100.0	34.8
22	52.2	52.2	34.8	34.8	39.1	72.5	43.5	40.6	40.6	39.1	23.2	29.0	29.0	39.1	34.8	36.2	39.1	39.1	40.6	39.1	34.8	100.0